

四つの変動期に焦点を絞った中国思想史

礪波 護

東大出版会刊の溝口雄三・池田知久・小島毅共著『中国思想史』を手にして、四十年前に愛読した中国思想に関する三冊の通史を思い出した。当時、私は東洋史の出身ながら、京大人文科学研究所の助手として哲学文学研究室の一隅に席を占め、共同研究班に参加していたので、

中国思想史に関しては、やはり東洋史の出身ながら思想史に造詣の深い島田虔次と、中国哲学史専攻の平岡武夫・福永光司の教導にあずかることが多かった。

島田は、何よりも岩波全書の武内義雄『中国思想史』を熟読するように、と推奨された。後に島田「武内博士の学恩」(『武内義雄全集』第八巻月報、角川書店、一九七八年)で、大学入学と同時に購入した『支那思想史』(のち『中国思想史』

と改題)は「今では背表紙はとれかけ、綴じ糸はゆるみにゆるんで惨憺たる状況を呈している。つまり、それほどこの本には御厄介になったのである」と、回顧する話柄をお聞きした。

武内『中国思想史』は、東北大学での普通講義の三年ごとに上世・中世・近世に分けた講本に基づく全三〇章。「上世期(上) 諸子時代」一〇章分、「上世期(下) 経学時代」三章分、「中世期 三教交渉の時代」六章分、「近世期 儒学革新の時代」一一章分からなっている。

時あたかも大修館書店から十巻ものシリーズ(『中国文化叢書』)が発刊され、私も小倉芳彦編の8『文化史』の一章の執筆を依頼されていた。一九六七年に、赤塚忠・福永ら編の3『思想史』が出版

溝口雄三・池田知久・小島毅著
中国思想史



A5判 274頁
東京大学出版会 [2625円]

され、総説を書いたのは、武内門下の金谷治であった。

金谷は、「一、思想史とは何か」につづく「二、中国思想史はいかに研究されてきたか」で、研究史を整理した。まず日本における中国思想史研究の起点として、一九〇〇年に出版された遠藤隆吉の『支那哲学史』を高く評価し、それとは別に、清朝考証学の成果をおおはばに取り入れた狩野直喜の研究法、すなわち後年一九五三年に『中国哲学史』の名で公刊された文献学的方法を紹介した。ついで中国における思想史研究の起点として画期的な意味をもったのは、一九一九年に出た胡適の『中国哲学史大綱』であっ

たと指摘し、それをのりこえた著作が、一九三四年に公刊された馮友蘭の『中国哲学史』であった。馮の哲学史では、西洋的な叙述式の哲学史と中国的な選録式（思想家の個人ごとに資料をまとめ、それを時代順に従って配列する）哲学史との両形式を折衷するとともに、歴史は進歩的なものだという史観をはっきり立ててその哲学史を構成した、と述べる。

この馮友蘭の著書に匹敵するのが、二年のちの一九三六年に出た武内の『支那思想史』であるとする金谷は、「思想史という名称を用いたことについて、著者は理由を述べていないが、その内容からすると、従来の哲学史がいずれかといえば儒学中心で、しかも個別的な叙述になっっていることへの批判から、種々の思想のいりくんだ流れをそのまま伝えようとした意図のあらわれではないかと思われる」と書き、「また中国仏教思想の流れをおおはばにとり入れ、宋学の勃興をそれとの関連で詳しく追迹したことも、この書の大きな特色であった」と述べて

いる。

〈中国文化叢書〉の『思想史』は、金谷の「総説」につづき、「古代の思想」は渡辺卓、「中世の思想」は日原利国・高田淳・荒木見悟、「近世の思想」は友枝龍太郎・山下龍二・佐藤震二、「近代の思想」は後藤基巳・山口一郎がそれぞれ時代順に分担執筆していた。

その翌一九六八年、小島祐馬（一八八〇—一九六六）の三周忌を期して出版された『中国思想史』（創文社）は、前後二年にわたる京都大学の普通講義を、受業生のノートに基づき、前期の分を森三樹三郎が、後期の分を平岡武夫が整理したものである。前期は「序説 中国思想史の意義ならびにその研究資料」を巻頭にして第六章「前漢の思想統一」まで、後期は「序言」から第十章「朱子の集大成」までの構成になっている。

池田秀三の「小島祐馬」（礪波護・藤井讓治編『京大東洋学の百年』京都大学学術出版会、二〇〇二年）が明瞭に解説するように、狩野直喜の文献実証学が経学・

■上海美術館コレクション

1979-2007

▼5月10日(土)〜6月8日(日) 日中友好会館美術館（東京都文京区後楽1-15-13）都営大江戸線・飯田橋C3出口より徒歩約1分）▼10〜17時（月曜休館。金曜日のみ19時まで開館）▼入館料無料

張曉剛や方力鈞、劉小東などオークションで話題の画家の初期作品や、前衛美術グループ・星星画会のメンバーであった嚴力、抽象芸術の代表的な画家の一人である申凡など、中国現代アートを語る上で欠かせない画家たちの作品を紹介。

▼財団法人日中友好会館：上海美術館主催
▼お問合せ 財団法人日中友好会館文化事業部 ☎03-3815-5085

▼日中友好会館ホームページ <http://www.jdc.or.jp/>

●日中演劇交流・話劇人社、シアターX共催
中国演劇ウィジュアル講座 第9回
中国の影絵人形劇

▼講師：山下一夫（神田外国語大学専任講師）
▼5月24日(出)14時から 劇場シアターX 会議室「コミュニケーション」（東京都墨田区两国2-10-14/JR両国駅より徒歩3分）
☎03-5624-1181 ▼参加費 一、〇〇〇円（資料費を含む）▼シアターXホームページ <http://www.theaterx.jp/>

儒学を中心とする學術史研究を根幹としたのに対し、本書は中国思想を社会思想史の枠組において考察したものである。

小島のこの学風は、京都帝大の文科大学で狩野直喜に師事して中国学を修める以前に、法科大学で政治・法律・経済学を学んでいたことと、一九二五年から二年半にわたってフランスに留学して、デュルケーム学派の社会学およびその流れを汲むフランスの中国学者、アンリ・マスベロとマルセル・グラネの影響を受けて醸成されたことによる。中国思想を社会思想として把握し解明せんとする小島の研究視点・方法は、戦後において多くの研究者に継承されてきた。

ちなみに小島『中国思想史』の家蔵本が、恐らく数部のみ作成された総革装、四方映入りの豪華版であるのは、平岡に依頼された私が後期分を校正した記念として戴いたからである。

今回の溝口ら共著『中国思想史』は、同じ出版社から二〇〇一年に刊行された溝口雄三・丸山松幸・池田知久(編)の『中

国思想文化事典』と対になるもの。主要目次は、つぎの通りである。

はしがき

第一章——秦漢帝国による天下統一

天人相関と自然／天下のなかの人間／国家の体制をめぐって／儒教国教化と道教・仏教

第二章——唐宋の変革

新しい経学／君主像の変化／政治秩序の源泉／心をめぐる教説／秩序の構想

第三章——転換期としての明末清初期

政治観の転換／新しい田制論と封建論／社会秩序観の転換／人間観・文学観の変化／三教合一に見る歴史性

第四章——激動の清末民国初期

清末の地方「自治」／西欧近代思想の受容と変革／伝統のなかの中国革命／現代中国と儒教

あとがき

ブックガイド

人物生卒一覧

事項索引

「はしがき」によると、本書は思想史とはいえ哲学的な言説の縷述ではなく、また事項や固有名詞がならぶ通史の構成をとってもない、長い歴史のなかで、そもそも中国の何がどう変化し、どう現在とつながっているのか、その変化の断面に即して歴史のかくれた動力を浮き彫りにする方法を、思想史に求めたもの。

中国を外部から景色として眺めるのではなく、内部に視座を置いて見なければ、単調な王朝の交替史としか映らない時代の底に、ゆつたりとはあるが大きな歴史の変革があったことに気づかされる、とした上で、本書は中国史上の四つの大きな変動期に焦点を絞り、そこにどういう新しい歴史が生みだされたのかを解明しようとする、と述べている。

四つの変動期とは、第一にまず秦漢帝国の成立にいたる過程(第一の変動期)であり、ここに二千年におよぶ中央集権的な王朝体制が誕生した。その後、皇帝専制のもと、唐代までの門閥・貴族社会は、いわゆる唐宋変革(第二の変動期)

によって、宋代以降、実力本位の科挙官僚制社会へと巨大な転換を遂げる。のち明末清初期（第三の変動期）には、朱子学の民衆化や陽明学の興りに見られるように、士紳層が民衆のリーダーとして地方の社会秩序を主体的に担いはじめ、近世から近代への扉を押し開いた。この士民の力がやがて清代を通じて上昇し、ついに辛亥革命（第四の変動期）として王朝体制そのものを瓦解させた、とする。すなわち、多くの歴史家はアヘン戦争を近代の出発点とする革命史観を選択してきたが、本書ではこうした史観は採らない、と。これら四つの変動期に対応する本書の各章は、第一章が池田知久、第二章が小島毅、第三章と第四章が溝口雄三により分担執筆されている。

溝口の「あとがき」によれば、出版企画は一九八〇年代にさかのぼり、姉妹篇『中国思想文化事典』に先だって企画されていたため、『事典』出版の翌年から著者三人による勉強会をつづけ、三つのコンセプトを共有した。第一は西洋中心

主義の視座を意識的に警戒し避ける。第二は事項の羅列に終始しがちな王朝史のスタイルは採らず、大きな変動期に即して歴史の変化相を叙述する。第三は執筆にあたっては開かれた叙述に努める。また、文体は三人三様であるが、統一はしなかつた。叙述において第一章が哲学的であり、第二章以下が社会的であるのは、対象とする文献が時代によりそれぞれ異なるという、資料的制約にも因っていることをお断りしておく、と。

半世紀近く前、卒業論文の対象に唐宋の変革を選んだ私にとって、四つの大きな変動期に焦点を絞った本書は、目次を瞥見しただけでも、興味津々の書物である。読みすすめるうち、各章とも期待に背かぬ鮮やかな切り口で論述されていることに感心した。さきの『中国思想文化事典』が、大項目主義による概念史で、それぞれ満遍に目配りした事典であったの対極であることにも共感を覚えた。両書はまさに一对の成果である。

大雑把な対比をすると、かつての私の

愛読書三冊のうち、行き届いた武内義雄『中国思想史』が『事典』に似ていて、社会思想的な観点に立脚した小島祐馬『中国思想史』と、『中国文化叢書』の『思想史』の系譜につらなるのが本書なのである。その点から言って、本書巻末（ブツクガイド）の通史の項に、小島の『中国思想史』のみが挙げられていないのは、残念である。（となみ・まもる 大谷大学）

■唐三彩展

館藏品より中国・唐時代の彩り華やかなやきもの「唐三彩」の優品を展観。

▼4月26日(土)～9月21日(日)

▼松岡美術館（東京都港区白金台5-12-16 / 東京メトロ南北線・都営三田線「白金台駅」①番出口から徒歩6分 / ☎03-5449-1025-1）

▼午前10時～午後5時（入館は4時30分まで）*毎週月曜日（祝日の場合は翌日）休館。ただし5月5・6日は開館し、7日は休館。

▼一般入場 〇円 / 中高大生 五〇〇円

▼松岡美術館 ホームページ <http://www.matsuko-museum.jp/>